

ヨハン・ホイジンガ研究の動向

～近代文明批評に焦点をあてて～

杉浦 恭（愛知教育大学）

1. 発表の趣旨

本発表の目的は、近代文明批評家としてのホイジンガ（Johan Huizinga 1872-1945）に関する研究動向を報告することにある。これは、近年、オランダの歴史学界でおきているホイジンガの再評価論、つまりホイジンガを近代文明批評家として捉えようとする動きを受けてのことである。これまでホイジンガの近代文明批評については、体系的に捉えて分類した研究はないので、幾つかの柱立てをして整理することにした。

2. ファシズム批判と近代文明批評

1930年代の前半、ホイジンガはナチズムに照準を合わせながらもファシズム全般に対して批判的態度を現し始める。その代表的著作が1935年に出版された『明日の影のなかに』である。これはオランダ国内はもとより、ヨーロッパ全土で反響を呼んだ。

Pellecom(1936)によれば、『明日の影のなかに』は、この時代の人々が何となく心に感じていながらも言葉で表現しにくかったことをうまく言い当てた作品であるという。作品の内容が広く人々の日常生活全般を扱っていることで、日頃、物事を深く考えない人々が、考えるきっかけをもつようになったという。

Kaegi(1947)は、歴史学者としてのホイジンガがヨーロッパの政治に向かって声をかけたのが『明日の影のなかに』であるという。ホイジンガが取り上げた内容のなかで最も危機感をもって訴えたのは政治と科学の結合である。知の危機が道徳の危機へと悪転するのは、科学の乱用だけでなく、知的機能の純粹さの否定にもある。それが顕著に現れるのが政治における悪用であるとしている。

確かに『明日の影のなかに』は内容からしてファシズム批判の書である。しかしこの作品に関するコメントをあたってみると、意外なことにファシズム批判として読み込み論じている文献の少ないことに気づく。ファシズムを視野に入れながら大衆社会論、そしてさらに広い枠組み、つまり近代文明批評として読み込もうとしているものが多いのである。

3. 歴史家から近代文明批評家へ

近年出版された研究書(Wesseling 1996, p.10)に次のような記述がある。

「ホイジンガに関する研究は、過去と同様、今日でもやはり『中世の秋』を対象としているものが多い。しかし1930年代には『明日の影のなかに』がそれまでのホイジンガのイメージを一新した。歴史家から近代文明批評家として世に認識され出したのであった。」

当時の研究者はこれをどう見ていたのだろうか？

ホイジンガと同じ時代に生きたオランダの歴史学者 Vollgraffは次のように言っている。

「ホイジンガは『中世の秋』と『エラスムス』を著して世界的名声を得た。誰もがホイジンガはその後も文化史家として生きてゆくだらうと考えていた。しかし、ホイジンガは自らの生き方を近代文明批評家に転向した。過去の時代にあこがれ、文化史の研究を継続したかったホイジンガに、現在の状況がどうしてもそれを続けさせないほどの問題を提示したからである。率直に言ってしまえば、ホイジンガは仕方なく近代文明批評を行うようになったのである。現代の病に対する警告を、歴史家の眼から見た道徳的義務意識のうちに発せざるを得なかったのである。(Vollgraff 1945, p.30)」

当時の歴史学者が見ても、ホイジンガは歴史家から近代文明批評家へと転向したように見えたのである。事実、ホイジンガの業績を見ても、それまで行ってきた「文化について記述的に取り組む研究」に加えて、1920年頃から「文化に対する規範的な研究」姿勢が目につくようになる。新たにホイジンガには、近代文明批評家としての評価が加えられることになったのである。

4. 近代文明批評の内容と分析について

Wesseling(1996)は、ホイジンガの近代文明批評を三つの観点から捉えられるという。

第一に、ホイジンガの個人的主観性から見た捉え方であり、ホイジンガの人生と性格・人格から分析している。ホイジンガの近代文明批評と身近に起きた出来事との関連性について調べた結果、近代文明批評に関する作品の多くは、ホイジンガの周りで起きた何らかの変化と時期が一致しているという。

第二に、集団的主観性から見た捉え方であり、オランダ人としての国民性から分析している。その結果、ホイジンガの作品に見られる近代文明批評と道徳観は、オランダの精神と規範に則ったものであるという。

第三に、時代の主観性から見た捉え方であり、この時代の精神から分析している。その結果、ホイジンガは現代という時代そのものが病に侵されていると感じており、時代の精神を、政治体制とそれに影響を受け左右される文化と文明という観点で捉えているという。

ホイジンガの近代文明批評の内容について分析と考察を試みたもう一人の研究者がLeon Hanssenである。まず彼は、文明批評について、それを述べる人間の規準や立場について言及する。そして多くの文明批評家たちは、個人、国民、歴史的なアイデンティティーから文明批評を行っているという。ホイジンガも基本的にこの範疇にあると Hanssenはいう。

個人という視点からホイジンガの文明批評を見れば、ホイジンガは自分の精神的基礎と拠り所をかなり客観的に分析していたが、自分の人格を単純でならん問題がないと考えていた点は、ホイジンガの自己イメージに過ぎないという。

国民、つまりオランダ人としてのアイデンティティーから見たホイジンガの文明批評には、オランダの地理的・政治的位置や役割が強く作用しているという。

歴史的なアイデンティティーからホイジンガが文明批評を展開したことについては、17世紀のオランダとの対照で現代を批評したと分析している。

Hanssen(1996)によれば、ホイジンガは20世紀に入ると繰り返しオランダの精神の特徴について記そうとしてきた。東西文化の架け橋となるオランダのイメージを持ち続けてきたのに、1930年代に入るとそれも空しさに変わってしまった。そのため過去のオランダ、たとえば17世紀のオランダに理想を求めだした。歴史的なアイデンティティーから文明批評を行うようになった所以がここにあるという。

5. おわりに

ホイジンガの近代文明批評は1910年代に始まったが、1930年代になるとホイジンガ自身が近代文明批評家として世に知られるようになった。それは、時代・社会背景が影響を及ぼしたと思われるが、それ以前のヨーロッパの近代化のなかで起きた様々な矛盾や問題点、特にホイジンガにとってみれば、文化の保持と創造に近代文明が及ぼした負の作用が、ホイジンガを近代文明批評家にさせたと思われる。

なお、引用・参考文献は、発表当日配布する補足資料に記すことにする。